

ツイキャス読書会 課題図書 川端康成『雪国』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第9回のツイキャス読書会の課題図書は、川端康成の『雪国』（新潮文庫）です。

今回もたくさんの応募がありました。

読書感想文下さった皆さんありがとうございます

「雪国」の感想

川端康成の「雪国」を初めて読んだ。以前「伊豆の踊子」をちらりと読んだ記憶はあるが、情景描写が印象的であったような気がするが、本筋の登場人物たちの動きはどこか捉えどころがなかったことを微かに記憶している。

本作「雪国」でも時代背景が不案内なところが多く、地の文も会話もそもその前提となっている知識が欠けているためか、理解できないことが多かった。また、次の行で急に場面が変わったり、あれ、地元に戻ったかと思ったらもう雪国に戻ってきてたのか、とか、火事場に向かう最中にえらく悠長に会話してるなあ、など本当にこの読み方で合っているのか疑心暗鬼になりながらつかえつかえしか読めなかったため、作品を鑑賞するという段階には至れなかった感じがする。

島村は東京に妻子がありながら、駒子と頻繁に逢瀬を繰り返す、それには飽き足らず葉子の美しい声が気になって仕方がない。島村のところに突然かつ頻繁に出没する駒子も話の中盤で結婚していることが判明する（結婚しているながら別の許嫁のために芸者をするってどういうこと？）など、「一体何をやってるんだ？貞操観念はこの時代の方がもっと厳しかったのではないか？姦通罪とか」と現代人の私は思ってしまう。恐らくそういった見方は下衆の勘繰りというか、もののあはれを理解しない、正しい読み方ではないのだろう。

Wikipedia で調べたところ、本作がノーベル賞受賞の選考対象となった作品と知った。英訳が秀逸だったのだろうか？それだけではあるまい。あらすじにもあるように、今では失われた古きよき日本の雪国の美しい景色の描写を背景に、島村の冷静な観察の視点から見た島村と好対照をなす駒子の熱情に突き動かされた発言や行動の哀れさが、作品が上梓された同時代の多くの人々の心を打ったのだろう。本作を鑑賞するためには自分も読者のレベルを一段引き上げる必要がある作品だと思った。

（おわり）

「雪国」 あらすじ

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

島村は汽車のなかで「駅長さあん。駅長さあん。」と呼ぶ、悲しいほどの美しい声の葉子という娘に会った。窓越しの夕景色にうかがう葉子の顔のなかにもし火がともった。島村は窓越しに見入っていた。二人は島村と同じ駅で降りた。

島村は芸者に出たであろう駒子に会った。

手紙も出さず、踊りの本を送る約束も果たさなかったが、責めるどころか、からだいっぱいに懐かしさを感じていることが知れた。

初めて、訪れたのは新緑の登山の季節に入った頃だった。

無為徒食の島村には自然とまじめさを失いがちなのでそれを呼び戻すためによく一人で山歩きをする。

温泉宿へ来ると芸者を呼んでくれるように言ったが、あいにくこの日は芸者が足らず、宿屋の客室へなどめつたに一人で出ないけれども、全くの素人とも言えない、不思議なくらい清潔な娘が来た。

島村はその娘、駒子に芸者を世話してくれるように執拗に頼んで、ようやく連れてきたが、肌の黒い、いかにも山里の芸者であった。島村の女欲しさは味気なく消えた。

部屋を出て、先ほどの娘に出会った。島村は最初からこの女が欲しいだけだった事に気付いた。

その夜、駒子は酔って島村の部屋に入ってきた。

島村は、ゆうべ汽車で会った病人を世話する葉子の話をした。細君なのかという問いかけには答えず、けしきばんだ。

(おわり)

『「雪国」を読んで』

主人公島村は、親の財産で悠々自適に生きていける人間であり、それ故幼稚な性質を、奇跡的にも保持している。人の目が無ければ安全で、隠された思いは誰からも知られることがなく邪魔されることもないと、捉えている。その安全に近づこうとする者の鋭さを、彼は好まない。

島村における幼稚な性質の運用は、彼の大人としての自己欺瞞によるもので、相矛盾する価値観を島村の内面に、すばやく差し替える。日本踊から西洋舞踏への鞍替えや、駒子を犯しながらそれを彼女の責任とした姿勢なども、それであろう。そんな自己欺瞞で動く島村に、駒子は惹かれてしまう。彼女のみた島村はどこか子供じみた、人の良い男性だった。しかしその正体は、女の体のみを愛する退廃人間だった。

駒子は二人目の貰い手から離れ、師匠の家に身を寄せようと芸者になり自立したが、葉子がいた。葉子は手に職をつけることもせずただひたすら自分をだまし、人をだまし続けた。行男も葉子の芝居と巨乳に惑わされたのであろう。

「— 森の中の蟋蟀 どういうて囀るや —」

葉子が自己欺瞞に沈んでいったのは、自分らしく生きる術を知らなかったため。駒子はそんな葉子から奪われ、嫉妬されながらも彼女の保護者であろうとした。ある意味、葉子は駒子の戦友だった。本当に幸せと思える人生を送れずに、嘘を重ねる。

火災の村へ向かう島村と駒子だったが、村の鎮守近くの踏切で足を止める。そこは村の境界線だったのかも知れない。駒子は島村に、付いてこなくてもいいと告げる。

「— 恐ろしい艶めかしさだ —」

そのとき見上げた天の河は、島村における駒子の象徴であった。島村は、そんな駒子を追いかけ、あるいは天の河に導かれるように走り、村に至る。

そこで島村が見届けたのは、火事で焼け落ちる建物の下で死にゆく葉子と、その戦友を抱えて、必死な形相で踏ん張る駒子の姿だった。天の河は島村を吸い寄せる — これが駒子だ — そう教えるように。

(おわり)

見られる存在の愛情の徒労

窓や鏡を通して間接的に見る女性は風景も相まって美しく見えるが、直接的に見る駒子や葉子に対しては、見返りのない愛情を注ぐ人間が浮き彫りになり徒労だと感じさせる。東京で家庭を持つ島村が、一時の休息や快楽を求め訪れる雪国で、幻想から現実へとスライドしていく物語。

「『こいつが一番よく君を覚えていたよ』、と人差し指だけ伸ばした左手の握り拳を、いきなり女の目の前に突き付けた」(p18)

芸者とはいえ、久しぶりに会う人に対し、第一声でこのような行動をとれるのだろうか。会いに行く電車の中で左手人差し指を動かしたり眺めたり匂いを嗅いだりと当時のことの空想をそのまま爆発させてしまったのか。肉欲の対象としてしか見ていないばかりか、それを表に出しているという点から、雪国での島村は、思った行動をそのまま表現している。雪国は国境を隔てて東京での生活から完全に切り離している幻想的な空間だ。

芸者を肉欲の対象物と捉えているから、叶わぬ駒子の想いや葉子の献身を徒労だと判断する。島村は「見る存在」であるのに対して、「見られる存在」である芸者の恋愛など徒労にしかすぎないという見方をしているように見える。人間にとって恋愛自体が徒労だと感じているようにも見受けられる。島村は駒子の境遇に介入していき好意を向けられるのも億劫になっていく。

「駒子が島村の傍から飛び出していた。駒子が叫んで眼をおさえたのと、ほとんど同じ瞬間のようだった」(p177)

葉子が落ちた瞬間に飛び出していく駒子に対し、島村は初めて葉子を見たことを思い出すだけで、駆けつけない。状況把握に徹し、葉子を胸に抱えて運ぶ駒子の手助けもしようとしない。島村とは人間なのだろうかとすら感じさせるほどに、動き出さず昔の思索にふける。「見る存在」であり続ける。

雪国は幻想的な空間であるべきなので、火事が起こりえるはずがない、芸者から好意を向けられる必要はない。現実を直視させられた島村は、次の雪国を探すのだろう。

(おわり)

駒子「勝手に私を可哀想にしないで頂戴」

雪国を読む前に、宮澤さんがいくつかの動画で語っていたが、それを聞くと駒子がとても可哀想な女性のような印象で、罪と罰のソーニャのような女性を想像していた。実際に読んでみると、ソーニャのような悲愴感は感じられず生き活きとしている女性であった。確かに、境遇的にソーニャほど不幸な境遇ではないものの、客観的に見るとやはり不幸な境遇である。ではいったい、この生き活きとしたものはどこから来ているのだろうか。

読み終わって感じたのは、駒子は物事を幸せに捉える力（欠乏よりも充足を捉える力）がとても優れているということである。日記をつけていることを話している場面では、「整った日記帳ではない」という欠乏よりも「日記が書ける」という部分に注目しているし、島村が約束をすっぽかしたことも少しだけ怒ると島村に会えている現在の喜びに飛びつく、布団が歪んでいることよりも布団を敷いてくれた親切を大事にする。

最後の火事場に向かう場面の天の河や、「一年に一度でいいからいらっしゃいね。私のここにいる間は、一年に一度、きつといらっしゃいね。」という台詞などから、織姫と彦星を彷彿させるが、ここでも会えない大部分よりも、会える数日間がとても愛おしかったのだろう。

こう書くと駒子が幸せなように感じるものの、駒子は幸福なのではなく、無理やり不幸をはねのけていると感じる場面もある。お師匠さんの息子の行男が倒れたことを葉子が知らせに来たものの、結局顔を見せに行かない場面や、お墓参りに行くことを拒絶する場面である。あの時、駒子には島村が

「君にとって、唯一の幸福だった部分だったのだから、大事にしまよ。」
と言っているように感じていたのではないだろうか。そして、

「別に特別な存在でもなんでもない。勝手に私を可哀想にしないで頂戴。」
という意味で拒絶したのではないだろうか。

しかし、このような拒絶をしてしまうということに、心の奥底では寂しさがあるのでは。と感じてしまう。

(おわり)

『 雪国 』 感想 ～夢かうつつか～

「夜の底」とは、ただでさえ暗い夜が沈殿している深い闇だ。その夜の底が白くなるとは、なんという銀世界なのだろう。現実とは思えない場所だからこそ、島村はトンネルをくぐり「雪国」に向かうのだ。

島村には、妻子持ちという「現実」がある。だからこそ、そうでない世界に来たつもりが、駒子の圧倒的な「生」に現実をみてしまう。距離を置こうとする島村に駒子は恋をしてしまう。島村の前では、許嫁とされる行男のこともはぐらかし、行男が亡くなる際にも駆けつけない。現実をみていない男のために、自らが恋の「底」に落ちてしまった。

一方、島村は現実味のない葉子が気になってしまう。悲しいくらい美しい声の葉子。

今ここにある現実ではなく、島村にあてもないまま東京に連れていってくれと頼む葉子に、好きでもない許嫁のために芸者になったリアリストの駒子より惹かれてしまうのだ。

恋に落ちた駒子にできることは、わざと葉子を島村への使いにやったり、駆け引きをふっかけることだけだ。そんな健気な駒子に対して、自分に対する想いは「徒労」だと言い放つ島村。確かに現実離れするために湯治場に通う島村にとって、本気の想いが重いのは理解できる。でも、駒子と同じ女性の私は駒子の気持ちがわかり過ぎて胸が詰まってしまう。

雪国の美しい情景描写の陰に見え隠れするのは、女性の嫉妬や憎悪、諦め等とうてい人に見せたくない感情だ。夜の白い底だって溶かしてしまうくらいの辛さだ。

駒子が逢えない日々を指折り数えていた一方、島村は全く無頓着だ。駒子には島村との世界が現実でも、島村には違うからだ。永遠のすれ違いは、哀しいけれど距離を縮めることはないだろう。

死ぬ時でさえ、非現実的だった葉子に対して「気がちがうわ。」と叫ぶことで、島村に現実をみてほしかった駒子。「夢」の葉子より、「うつつ（現実）」の自分を島村にみてほしかったに違いない。でも、島村の心には、これまた現実離れした美しさの満天の天の河が流れ落ちてしまうのだ。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『二人を永遠の関係にした立役者葉子』

時代の違いか、生きる土地柄の違いか、私にはこの小説はファンタジーのように感じられた。職業や妻子など島村の東京での日常が、ひとたび国境のトンネルを抜けると雪国という非日常の世界となる。その不思議な国では「清潔」な芸者駒子が精いっぱいの天真爛漫さで彩ってくれる。

そんな島村の雪国の非日常だったが、徐々に駒子との間柄が温泉街に周知のものになってくると、「結婚」とか「家族」などの「日常」が島村の前に泥臭いにおいを呈してくる。駒子の自分への思いがダイレクトに心に沁みってくるなかで、これ以上自分のわがままを続けられないことを感じる島村。この村から手を引かなければと実感したその時、葉子が繭倉の2階から地面に落ちた。

謎めいた女性葉子。島村が東京に戻る見送りの際や墓参りの時など、要所要所で登場する葉子は、島村にとって「雪国」を泥臭い日常から遠ざける魔法使いのような存在だ。葉子は島村が日常の世界に戻っていかうとする場面で、魔法の杖をふりかざしもう一度弱まった魔法をかけなおしにやってくる。最後は、自らをセンセーショナルな死に追いやることで、島村と駒子の長編小説に葉をはさんだ。島村にとっての「雪国」は、たとえ年月とともに記憶の中でファンタジーと化しても、永遠に心に刻まれることとなった。

雪国での島村のひとつときは、たしかに「清潔」そのものだっただろう。自らの手を汚さずに周囲のすべてがお客様として自分を迎え入れてくれる、ていのよい非日常。そのなかで、土着の女としてたくましく生きる駒子の姿が、雪晒しの、白い雪の上に横たわる色鮮やかな反物のように美しく浮かび上がる。しかし、忘れてはならない。美しい雪の下には島村の身勝手さが覆い隠されている。駒子の心に切なさを刻み込み、春の雪解けとともに東京の日常にサッと戻っていく島村。「あかんな、許せへんな。葉子、とどめを刺したりいな。」島村への復讐心が沸々と私の心に煮えたぎる。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『因果の総体、天の河』

『為体の知れない娘（※注 葉子）と駈落ちのように帰ってしまうことは、駒子へのはげしい謝罪の方法であるかとも思われた。またなにかしらの刑罰のようでもあった。』

島村が三度目に『雪国』を訪れたとき、なぜ、駒子は三度目の年季に入っていたのか？ 彼女は、生活の苦しい実家のために、東京に芸者に出た。二度目は、許婚だった行男の治療費を捻出するため。三度目は、もしかしたら、気の狂れかかっている葉子の生活費を援助するためだったのではないか？ 『私の荷を持って行っちゃってくれない？』という駒子のセリフに、そのことが暗示されている。

駒子が、師匠や行男の墓参りをしないのは、嫉妬深い葉子への配慮である。村上春樹の『ノルウェイの森』で、自殺した直子が、ワタナベ君に『野井戸』について語る夢のくだりがあるが、葉子もまた、直子と同じように『野井戸』に落ちている。『死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。』とは、葉子の存在のことを指す。葉子は、生きながらに死に囚われている。駒子が墓を参らない理由は、『生きた相手だと、思うようにはっきりも出来ないから、せめて死んだ人にははっきりしとくのよ』というセリフに表れている。駒子は野井戸の前で踏みこたえている。葉子は取り憑かれたように墓参する。Let the dead bury the dead. (死者をして死者に葬らしめよ マタイの福音書 8-2)

駒子のみうちには熱い生がある。葉子の澄んだ目は、死だけを見つめている。

火事場で葉子を抱く『駒子は、犠牲か刑罰を抱いているように見えた』

島村は、不謹慎にもこのまま葉子が死んでくれれば、

駒子が、葉子からの憎しみから解放されると考えただろう。

しかし、葉子と関係のない駒子には、二度と関係しないだろう。

彼は、葉子と駒子の間に横たわる生と死のスリルを悲劇として堪能した。

わずかに、呵責と苦痛と悲哀を感じた。

死もその一部であるところの生のすべてが、天にひろがっている

悠久の時を流れるのは、見えるものと見えないものの因果の総体であった。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『雪国』 あらすじ (ウィキペディアより)

12月初め、島村は雪国に向かう汽車の中で、病人の男に付き添う恋人らしき若い娘(葉子)に興味を惹かれる。島村が降りた駅で、その2人も降りた。旅館に着いた島村は、芸者の駒子を呼んでもらい、朝まで過ごす。島村が駒子に出会ったのは去年の新緑の5月、山歩きをした後、初めての温泉場を訪れた時のことであった。芸者の手が足りないため、島村の部屋にお酌に来たのが、三味線と踊り見習いの19歳の駒子であった。次の日、島村が女を世話するよう頼むと駒子は断ったが、夜になると酔った駒子が部屋にやってきて、2人は一夜を共にしたのだった(以上、回想)。駒子はその後もなく芸者になっていた。

昼、冬の温泉町を散歩中、島村は駒子に誘われ、彼女の住んでいる踊の師匠の家の屋根裏部屋に行った。昨晚車内で見かけた病人は、師匠の息子・行男で、付添っていた葉子は駒子と知り合いらしかった。行男は腸結核で長くない命のため帰郷したという。島村は按摩から、駒子は行男の許婚で、治療費のため芸者に出たのだと、聞かされるが、駒子は否定した。

島村は温泉宿に滞在中、毎晩駒子と過ごし、独習したという三味線の音に感動を覚えた。島村が帰る日、行男が危篤だと葉子が報せに来るが、駒子は死ぬところを見たくないと言い、そのまま島村を駅まで見送った。翌々年の秋、島村は再び温泉宿を訪れた。去年の2月に来る約束を破ったと駒子は島村をなじる。あの後、行男は亡くなり、師匠も亡くなったと聞き、島村は嫌がる駒子と墓参りに行った。墓地には葉子がいた。

駒子はお座敷の合い間、毎日島村の部屋に通ってきた。忙しいある晩、駒子は葉子に伝言を持って来させた。島村は葉子と言葉を交わし、魅力を覚えた。東京に行くつもりは葉子は、島村が帰るときに連れて行ってくれと頼み、「駒ちゃんをよくしてあげてください」と言った。葉子は死んだ行男をまだ愛しているようだった。「駒ちゃんは私が気がいいになるというんです」と葉子は泣きながら言った。葉子が帰った後、島村はお座敷の終わった駒子を置屋(駄菓子屋の2階に間借り)まで送ったが、駒子は再び島村と旅館に戻り、酒を飲む。島村が「いい女だ」と言うと、その言葉を誤解し怒った駒子は、激しく泣いた。

島村は東京の妻子を忘れたように、その冬も温泉場に逗留を続けた。天の河のよく見える夜、映画の上映会場になっていた繭倉(兼芝居小屋)が火事になり、島村と駒子は駆けつけた。人垣が見守る中、一人の女が繭倉の2階から落ちた。落ちた女が葉子だと判った瞬間にはもう、地上でかすかに痙攣し動かなくなった。駒子は駆け寄り葉子を抱きしめた。駒子は自分の犠牲か刑罰かを抱いているように、島村には見えた。駒子は「この子、気がちがうわ。気がちがうわ」と叫んだ。